

古典を学びはじめの高校生に最適

旺文社

高校基礎古語辞典

東京大学教授

古田東朔 監修

旺文社

高校基礎古語辞典

古田東朔 監修

——教育のための出版社——

旺文社の事業

事業

放送

書籍

雑誌

模
擬
試
験
・
実
力
テ
ス
ト

全
国
学
芸
コ
ン
ク
ー
ル

進
学
積
立
プ
ラ
ン

大
学
受
験
ラ
ジ
オ
講
座

日
本
歴
史
展
望

学
芸
百
科
事
典
(エ
ポ
カ)

教
科
別
学
習
大
事
典
(ジ
ュ
ニ
ア
エ
ホ
カ)

チ
ャ
イ
ル
ド
エ
ポ
カ

学
習
図
鑑
・
科
学
書
(コ
ス
モ
ス
他)

文
庫
・
児
童
書
・
ス
ポ
ー
ツ
書

辞
典
・
事
典
・
語
学
教
材

教
科
書
(高
校
英
語
・
数
学
・
国
語)

高
校
生
向
学
習
参
考
書

中
学
生
向
学
習
参
考
書

小
学
生
向
学
習
参
考
書

螢
雪
時
代
(オ
ム
ニ
)

高
一
時
代

高
二
時
代

中
三
時
代

中
二
時
代

中
一
時
代

就
職
ス
テ
ッ
プ

大
学
受
験
講
座

ラ
ジ
オ
テ
キ
ス
ト

螢
雪
短
大

〔関連
団体〕

〈国際誌の刊行〉

旺文社インターナショナル

〈通信教育〉

財団法人 日本英語教育協会

〈L L 教室〉

財団法人 日本LL教育センター

〈学生のホテル〉

日 本 学 生 会 館

□「図書案内(小,中,高・一般別)」送呈。

〒162東京都新宿区横寺町 旺文社

旺 文 社

高 校 基 礎 古 語 辞 典

1982年9月20日 初版印刷

1982年10月1日 初版発行

編 者	旺 文 社
発 行 人	赤 尾 好 夫
編 集 人	中 山 行 雄
印 刷 所	共 同 印 刷 株 式 会 社
付物印刷所	開 成 印 刷 株 式 会 社
製 本 所	株 式 会 社 市 川 製 本 所
編 集 協 力	株 式 会 社 研 文 社

発 行 所 株 式 会 社 旺 文 社

162 東 京 都 新 宿 区 横 寺 町

電 話 (編集) 03-266-6356
(販売) 03-266-6416

乱丁・落丁はお取りかえますので本社に直接お申し出ください。

7581 721-13 0724 208054

© 旺文社 1982

(許可なしに転載、複製することを禁じます)

Printed in Japan

はじめに

古典を読んで理解するのはやさしいこととはいえませんが、本書は、古典を学び始めの高校生のために可能なかぎり親しみやすく分かりやすく編集した辞典です。

花の色は うつりにけりな いたづらに 我が身世にふる ながめせし間に

これは、『古今和歌集』に収録されている小野小町の歌で、百人一首にも採られているものです。ところで、この和歌の「うつりにけりな」を調べるとなると、ふつうの辞典の場合、単語に分解してからでないと引けませんね。分解してみますと、うつり（動詞「移る」の連用形）、に（助動詞「ぬ」の連用形）、けり（助動詞「けり」の終止形）、な（終助詞）ということになります。こういう具合にすらすらと単語に分解ができ、辞典を引いて「あせてしまったことだなあ」と訳せるような問題はないのですが、そうはなかなかないものです。

この辞典では、このような古典によく出てくる言い回しや連語・複合語を、教科書をはじめ広く親しまれている古典から多数拾い出して、そのまま引けるようにしてあります。当然、品詞分解も「なりたち」として示してあります。

このように、本書は古典を学び始める人たちのために、また、基礎力養成に役立つ辞典にしたいという願いをこめて編集しました。単に言葉だけを引いて調べる辞典ではなく、おもしろく読めて、確かな手ごたえを感じさせるといふことを心掛け、もちろん学問的にはあくまでも厳密で、さらにいろいろな細かな点に心を配りました。例えば、次のような特色を盛りこんであります。

◎助詞・助動詞・敬語動詞・重要語については詳しく語釈と解説をし、特に古文解釈の、かなめとなる助詞・助動詞には文法欄を設け、さらに文法に関する詳しい解説をし、また、学習方法・覚え方などにもふれてあります。

◎助動詞は、「うつりにけりな」の「に」(助動詞「ぬ」の連用形)のように終止形が分からなくても引けるように、終止形以外の活用形も見出し語として立ててあります。

◎教科書に収録されたものを中心に、有名和歌(百人一首はすべて)(四三六首)、俳句(一八三句)を収め、全釈を付け、修辭についての説明、本歌取りの場合はその本歌など、その参考事項なども解説してあります。

◎古典読解、文学史学習上必要な人名・作品名・地名(歌枕)・枕詞・文芸用語・有名作品の冒頭文、さらに古典を鑑賞する上に必要な知識・背景・有職故実などを「古典の常識」ということで、関係語彙の所で解説もしてあります。

◎**【学習】**として「格助詞『が』と『の』の違い」「『をかし』と枕草子」「『あかつき』と『しののめ』と『あけぼの』の関係」等々、見出し語に関連して、その解説からさらに発展した学習上の重要事項を解説してあります。

これらは、古典の世界のおもしろさを発見するきっかけとなり、ひいてはみなさんの古典学習の指針となつて大いに役立つものと思います。

最後になりましたが、本辞典の執筆・校正に多大な御尽力をいただきました諸先生方を左に記して、心から謝意を表する次第です。

芦田川康司、東節夫、井上久美、岩佐美代子、上原信義、大木淑子、日下力、小室善弘、近藤泰弘、坂梨隆三、鈴木泰、鈴木一成、高沢健三、千葉千胤、樋田賢二、中村一基、中村梧郎、中山崇、原田貞義、福田応彦、武藤元昭、望月善次、柳沢良一、渡辺剛志

(五十音順、敬称略)

この「高校基礎古語辞典」が、みなさんに愛され大いに活用されることを心から期待しております。

一九八二年 初秋

監 修 者

この辞典のきまりと使いかた

収録した語について

- (1) 上代から近世にいたる主要な古典から、使用頻度の高い語・使用の範囲の広い語を中心にして、古典の学習に十分な語(連語・複合語・成句・古典によく出てくる言い回し) 約一五〇〇語を選んで収録した。

- (2) 古典の読解や文学史の理解のために必要な地名・人名・作品名などの固有名詞、枕詞・文芸用語などを約一一〇〇語収録した。
- (3) 教科書にのっている作品などを中心に、著名な和歌四三六首(百人一首はすべて)・俳句一八三句を収録した。

見出しのたてかたについて

- (1) 見出し語は、歴史的かなづかいにより、太字のひらがなで表記して示した。ただし、人名・作品名は現代かなづかいによって見出しを示した。

- (2) 見出し語のうち、固有名詞・和歌・俳句以外の語については、使用頻度の高さ・使用範囲の広さ・重要度によって三つの段階にわけ、活字の大きさを変えて示した。

最重要語、主要助詞・助動詞(三行どり)……………約一〇〇〇語
 次位重要語(二行どり)……………約一〇〇〇語
 一般語(一行どり)……………約一三〇〇〇語

- (3) 二通りのかなづかいのあるものは両方を見出しとして掲げ、より一般的なもののほうに語釈をつけた。

いはけ・な・しイハケ「稚けなし」(形ク)……語釈をつけたほう
 いわけ・な・し「稚けなし」(形ク)↓いはけなし

- (4) 歴史的かなづかいと、現代かなづかいとが相違する語のうち、重要な語、ならびに漢字熟語を構成する漢字には、現代かなづかいによる見出しを掲げて検索の便をはかった。

あおうま「青馬・白馬」↓あをうま

こう……「広……光……皇……荒……黄……」↓くわう……

あわれ ↓あはれ

- (5) 見出し語を構成する要素を、「」でくぎって示した。ただし、地名・作品名・枕詞などには示さなかった。

あい・ぎやう「愛敬」

さう・ぞく「装束」

- ① 複合語・連語・成句などは、それを構成する最小の要素でくぎらず、大きなまとまりでくぎった。

- ② 接頭語はそのあとに、接尾語はその前に「」をつけて示した。

うち「打ち」(接頭)

さ・ぶ「接尾バ上二型」

- (6) 見出し語のうち、動詞・形容詞・助動詞・活用のある接尾語は、終止形で示し、語幹と活用語尾との区別のあるものには、その間に「・」をつけた。形容動詞は、語幹で示した。

あくが・る「懂る」(自ラ下二)

うつく・し「愛し・美し」(形シク)

らる(助動下二型) ・ば・む(接尾マ四型)

おろか「疎か・愚か」(形動ナリ)

- (7) おもな助動詞については、終止形以外のすべての活用形を掲げた。

さら 打消の助動詞「ず」の未然形。「思ひつつ寝ればや人の見えつらむ夢と知りせばさめざらましを」(古今・恋三)

- (8) 和歌・俳句は、最初の一句(発句)を見出しとし、(和歌) (俳句)の表示をして、そのあとに「」でかこんでその全体を示した。

あかねさす…(和歌)あかねさす 紫野むらさきの行ゆきき 標野ひょうのの行ゆきき 野守のりもりは見みずや 君きみが袖そでを振ふるる

見出しの配列について

- (1) 見出し語は、五十音順によって配列した。

- (2) 濁音・半濁音は清音のあとに、拗音・促音は直音の前に配列した。

- (3) 見出し語が同じ形の場合は、次にあげる順序によって配列した。

① 品詞などの順

接頭語・接尾語・名詞・代名詞・動詞・形容詞・形容動詞・連体詞・副詞・接続詞・感動詞・助動詞・助詞・枕詞・連語・成句の順。

② 動詞の場合には、

⑦ 自動詞・他動詞の順。

④ 四段活用・上一段活用・上二段活用・下一段活用・下二段活用・変格活用の順。

- ③ 和歌・俳句で、第一句が同じ場合には、第二句の表記の五十音順とした。

漢字表記および読みかたの表示について

- (1) 見出し語を表記するのに用いられる漢字があるものは「」でかこんで示した。二つ以上の表記があるものについては併記し、一般的なものから先に掲げた。また、送りがなどは、ひらがな・歴史的かなづかいで示した。

- (2) 見出し語のかなづかいが、現代かなづかいと相違する場合は、現代かなづかいに準じて、カタカナで示した。

- ① 見出し語の構成要素のうち、現代かなづかいと同じ部分は、―で示した。

あかり・さうじツグシ【明かり障子】(名)

- ② 二つ以上の読みかたがある場合は、該当する部分について、(―)をもちいて併記した。

あへーしらふアラモシラフ
うたふウタフ

品詞および活用の表示について

- (1) 見出し語の品詞は略称によって、(―)でかこんで示した。さらに、動詞・形容詞・形容動詞・活用のある接尾語については、活用の種類をも、略称によって示した。品詞の表示のないものは、連語・成句・古典によく出てくる言い回しである。(略称は、六ページの表を参照)

おとなぶ（大人ぶ）(自バ上二) じ(助動特殊型)

おもはゆ（面映し）(形ク) はむ(接尾マ四型)

しむ（助動下二型）

(2) 品詞は、次にあげる十一とした。

名詞・代名詞・動詞・形容詞・形容動詞・連体詞・副詞・接続詞・感動詞・助動詞・助詞

(3) 普通名詞の中で、動詞のサ行変格活用および形容動詞の語幹となるものについては、品詞を示すとともに語尾の活用も掲げて用法を指示した。

あん・ぎゃ【行脚】(名・自サ変)

あん・せん【安穩】(名・形動ナリ)

(4) 動詞については、自動詞・他動詞・補助動詞を区別して、(自サ四)・(他ラ下二)・(補助ラ変)などのように示した。

(5) 助動詞については、活用のしかたを活用表の形で、接続のしかたの説明とともに示した。

(6) 助詞については、次にあげる六つにわけて示した。

格助詞・接続助詞・副助詞・間投助詞・係助詞・終助詞

(7) 固有名詞のうち、物語・随筆・日記などの作品名、作家・歌人・俳人などの人名、山・川を含めた地名については【作品名】(人名)【地名】と表示した。

(8) 枕詞・歌枕は、【枕詞】【歌枕】と表示した。

語釈・解説について

(1) 語釈および解説は明瞭・的確・簡潔を旨とし、助詞・助動詞・敬語動詞その他の重要語については、特に詳しく解説した。さらに必要に応じて、**【なりたち】****【接続】****【参考】**、また、**【学習】****【冒頭文】**を入れた。

(2) 一つの見出し語について、品詞が異なる場合、活用の種類が異

この辞典のきまりと使い方

なる場合などは、**【一】**……によってわけ、行をかえて示した。その場合は、品詞などの表示、活用の種類の表示などは、**【二】**……のあとに示した。

お・ふ【負ふ】(自ハ四)ふざわしい。……

【三】(他ハ四)●背負う。……

(3) 一つの見出し語について、意味が二つ以上ある場合は、**【一】**……によってわけて示した。**【二】**……のそれぞれをさらにわけるときは、**【三】**……によってわけて示した。

(4) 必要な語については、解説にさきだって、その語についての語源・原義・転化の形などを「」で、位相を()でかこんで示した。

なお、語の転化の形についての説明に用いた約・転・略の用語は、次のような基準によった。

約…音の脱落による短縮形

・連続する二母音の一方が脱落する形

あらいそ↓ありそ いろおと↓いろと

おほとのおぶら↓おほととなぶら

・語中の一音節が脱落する形

しほしほ↓しほほ たわたわ↓たわわ

ここなる↓ここな ごぜん↓ごぜ

転…母音・子音の交替形、音の添加形、および音の脱落・交替などの複合した形

・母音の交替形

あかとき↓あかつき いみべ↓いむべ

さかさま↓さかしま

・子音の交替形

いなぶ↓いなむ

・母音の添加形

えん(縁)↓えに

・複合した形

なにしかは↓なじかは なにといふ↓なでふ

略…語の簡略形

あがためしのちもく↓あがためし

おましどころ↓おまし

(5) 解説文中のむずかしい語句には、(Ⅱ)でかこんで注をつけた。

(6) 見出し語について対義語がある場合は、語釈・解説のあとに「↑」の記号をつけて示した。語義の全体に共通する対義語は、最後の語義・用例のあとに「〜」でかこんで示した。語義の一部に該当する対義語は、その該当する語義のあとに示した。

(7) 語釈・解説が他の語と同じ場合は、その語を示し、語釈・解説をはぶいた場合がある。また、他の語の語釈・解説を参照すれば、その語についての理解がいつそう深まると思われる場合は、「↑」をつけて、その語を示した。

(8) 見出しとした和歌・俳句などには、全釈を施した。なお、枕詞・序詞・縁語・掛詞など修辭についての説明、出典によって表記の異なるもの、解釈に異説のあるもの、本歌どりの歌の場合はその本歌を、また学習上特記すべき事柄などについて、参考欄で解説した。

◎なりたち

おもに連語などには、その構成を明らかにするため、**なりたち**欄を設けて、組成・語形の変化などを説明した。

◎接続

助詞・助動詞については、**接続欄**を設けて、文法上どのような語、また、どのような活用形につくかを説明した。

◎文法

主要な助詞・助動詞には**文法欄**を設けて、文法的機能・用法などについてさらに詳細な解説をした。

◎参考

語釈にいつそうの徹底を期するため、**参考欄**を設けて、文法的機能・用法についての説明、時代による語の盛衰・語義の移り変わりなどの語史的説明、また語義の補足説明、類似語との比較説明、そのほか古語・古典を理解する上で必須の事項について解説した。

◎学習

見出し語に関連して、その解説からさらに発展した学習上の重要事項を、枠かこみで、見やすく詳しく解説した。(学習欄で扱っている項目は九・一〇ページ参照)

◎古典の常識

古典読解上知っておくと便利な知識・背景・有職故実などを解説した。「古典の常識」で扱っている項目は九・一〇ページ参照)

◎冒頭文

見出しでとりあげた作品のうち、大学入試などによく出題される作品については、解説のあとに冒頭文を載せた。

◎枕詞・歌枕・季語

(1) 枕詞は次のように示した。

あをによし アヲニ【青丹よし】**枕詞**「奈良^{なら}」「国内^{くにうち}」にかかる。

……。――寧楽^{なげ}の京師^{きやうし}は咲く花のにほふがてく今盛なり^{なり}へ万葉・三・三〇。『悔しかもかく知らませばお前が死ぬと知っていたら――国内^{こく内}どこと見せましものを』へ万葉・五・七。↓枕詞

(2) 歌枕はその歌枕を詠み込んだ和歌を引いて次のように示した。

あさかやま〔安積山〕〔地名〕歌枕 福島県郡山市にある山。……。『影さへ見ゆる山の井の浅き心をわが思はなくに』へ万葉・一六・三〇七。↓歌枕

(3) 見出し語のうち俳句の季語となるものは、その語釈のあとに〔夏秋図〕の略語で季を示した。また、見出し語から派生した季語は、次のように()にかこんで示した。

あし〔葦・蘆〕……秋 葦茂る夏 葦の花秋

用例・出典について

(1) 語義の理解を助ける適切な用例を次の基準により採録した。

① 著名古典を中心とし、さらに教科書・大学入試問題などによく取り上げられ、親しまれているもの。

② 文脈がわかりやすく、短くくぎれるもの。

(2) 用例文の表記は、歴史的かなづかいによった。むずかしい漢字は適宜読みやすい漢字に直したり読みがなをつけ、またはかな書きに改め、送りがなや句読点を補うなどして読みやすくした。

(3) 見出し語にあたる部分は、「――」で示した。見出し語が動詞・形容詞・形容動詞である場合は、その語幹にあたる部分を「――」で示し、語尾は、「・」で区切って、そのあとに示した。ただし、語幹・語尾の区別のない動詞(上・下・一・力変・サ変・下

二の「得」)、および助詞・助動詞(連語・複合語で、助動詞が語の末尾にくるものを含む)については、それらが活用して変化した場合、語形をそのまま太字で示した。

うつくし〔愛し・美し〕(形シク) ① かわいい。② 美しい。『父母を見れば尊し妻子^{めこ}見ればめづし――』へ万葉・五・〇〇〇

つ(助動下二型) ① 動作・作用が実現し、完了したことを表す。……。『山桜霞^{みずさ}のまよのほのかにも見てし人』へほのかに見た美しい人こそ恋しかりけれへ古今・恋二

さらに――もいはずわい『更にも言はず』言つてもない。もちろんである。『うちうちのもてなしけはひ(家庭内でのふるまいや感じ)おくれたらむ(そんな女)は――ず』へ源氏・帚木^{きぎ}

(4) 用例で、その一部分を省略する場合、省略する部分を「……」を用いて示した。

(5) 用例の中で意味のむずかしい部分については、該当する部分のすぐあとに、その訳または補説を()でかこんで示した。

あて・やか〔貴やか〕(形動ナリ) 高貴なさま。……。『心ばへ(性格など)――につくしかりつることを見ならひて(見なれて)』へ竹取・かぐや姫の昇天

(6) 用例の中で主語や目的語などが省略されているために意味がとりにくいものには、適宜主語や目的語などを、「――」でかこんで補足した。

あい・な・し(形ク) ①……。② おもしろみがない。興ざめた。『梨^{なし}の花は』げに、葉の色よりはじめて――く見ゆるをへ枕・花は

(7) 用例として採った和歌・俳句が、本文にとりあげられている場合は、次のように参照ページを明示した。

みやこどり〔都鳥〕(名) 水鳥の名。……。「名にし負はばいざ

ことばむ——わが思ふ人はありやなしやと」(歌意は五九ページ参照)〔古今・羈旅〕

(8) 出典の示し方は次の方針によって略語を用いた。個々の出典名については「主要用例出典略語一覧」(五三ページ)を参照されたい。

① 物語類は「物語」を、日記類は「日記」を、歌集は「和歌集」の部分省略した。ただし、私家集は書名をそのまま掲げた。また、「枕草子」は「枕」、「徒然草」は「徒然」、「万葉集」は「万葉」と略称した。

② 和歌には歌集名・部立を、俳句には句集名と作者名を記した。「万葉集」は巻数と国歌大観番号を示した。

〔古今・冬〕〔猿蓑さるもみ・芭蕉〕〔万葉・五・充ぐ〕

③ 近世の作品には、「近松」「西鶴」「黙阿弥」のものに限り、作者名を入れた。

〔浄・曾根崎そうねざき・近松〕〔浮・永代蔵・西鶴〕〔歌舞伎・白浪五人男・黙阿弥〕

④ 著名な出典には、「巻名」「巻数」「段数」「編名」「小見出し」などを指示した。「枕草子」は段の冒頭部分を掲げた。

〔記・上〕〔竹取・ふじの山〕〔枕・心にくきもの〕〔源氏・夕顔〕

〔栄花・殿上の花見〕〔今昔・三・四〕〔平家・六・入道死去〕〔盛

衰記・五〕〔徒然・八段〕〔おくのほそ道・平泉〕〔雨月・浅茅

が宿〕

略語・記号表

〔品詞・その他〕	名詞
(名)	代名詞
(代)	自動詞
(自)	他動詞
(他)	補助動詞
(補動)	形容詞
(形)	形容動詞
(形動)	連体詞
(連体)	副詞
(副)	接統詞
(接)	感動詞
(感)	助動詞
(助動)	格助詞
(格助)	接統助詞
(接助)	副助詞
(副助)	間投助詞
(間助)	係助詞
(係助)	終助詞
(終助)	接頭語
(接頭)	接尾語
(接尾)	〔活用〕
(四)	四段活用

〔上二〕	上一段活用
〔上三〕	上二段活用
〔下二〕	下一段活用
〔下三〕	下二段活用
〔力変〕	力行変格活用
〔サ変〕	サ行変格活用
〔ナ変〕	ナ行変格活用
〔ラ変〕	ラ行変格活用
〔ク〕	ク活用
〔シク〕	シク活用
〔タリ〕	タリ活用
〔ナリ〕	ナリ活用
〔口〕	口語活用
〔その他〕	検索の便をはかって設けた現代かなづかいによる見出し語
↑	対義語
↔	語義①②③……の全体に共通する対義語を示す
↓	他の見出し語の語釈やその語に係する事項などを参照することを示す

「学習」「古典の常識」一覽

この一覽は本文中に掲載した「学習」および「古典の常識」の項目すべてを示したもので、学習の便利なように系統的に分類して配列したものである。

▼「学習」項目一覽

◎混同しやすい語・対義語などの比較

「あいぎやう」と「あいきやう」……………	二
「あかつき」と「しのめ」と……………	二
「あけぼの」の關係……………	二
「あし」と「わろし」との違い……………	二
「うるはし」と「うつくし」……………	二
との違い……………	二
「おうな」と「をうな」……………	三
「おぼつかなし」と「うしろめたし」……………	三
との違い……………	三
「おほやけ」と「わたくし」の關係……………	三
「よし」と「よろし」との違い……………	三
◎文法的な解説をしたもの……………	三
四段活用 of 動詞……………	三七
上一段活用 of 動詞……………	三七
上二段活用 of 動詞……………	三七
下一段活用 of 動詞……………	三七
下二段活用 of 動詞……………	三七
カ行変格活用 of 動詞……………	三七

サ行変格活用 of 動詞……………	四〇五
ナ行変格活用 of 動詞……………	七
ラ行変格活用 of 動詞……………	五
形容詞……………	二三
形容動詞……………	三九
補助動詞……………	四〇
敬語動詞……………	四〇
「が」の識別……………	一三
副助詞「し」と過去の助動詞「き」の連体形「し」の識別……………	三
終助詞「しか」と過去の助動詞「き」の已然形「しか」の識別……………	三
「して」の識別……………	三
「て」の識別……………	三
「とも」の識別……………	三
「なむ」の識別……………	三
断定の助動詞「なり」と伝聞・推定の助動詞「なり」の識別……………	三
「に」の識別……………	三
「ぬ」の識別……………	三
「ばや」の識別……………	三
「らむ」の識別……………	三

格助詞「が」と「の」の違い……………	一七
過去の助動詞「き」と「けり」の違い……………	三
副助詞「さへ」と「すら」と「だに」の違い……………	三
完了の助動詞「つ」と「ぬ」の違い……………	四
副助詞「ばかり」と「のみ」と「まで」の違い……………	六
推量の助動詞「らし」と「らむ」の違い……………	七
◎作品の文体……………	七
「竹取物語」の文体……………	四〇
「土佐日記」の文体……………	三
「蜻蛉日記」の文体……………	六
「枕草子」の文体……………	六
「源氏物語」の文体……………	六
「紫式部日記」の文体……………	三
「大鏡」の文体……………	三
説話文学の文体……………	三
「十六夜日記」の文体……………	三
「徒然草」の文体……………	三

◎文学理念・文学史的事項

文学史上の「あはれ」と「をかし」

との違い……………三

「幽玄」について……………五

「有心」と「無心」について……………一〇〇

「歌合はせ」……………一〇三

「かるみ」について……………三九

「勸善懲惡」について……………三六七

「粹^{すい}」と「通^{つう}」について……………四七

「たをやめぶり」と「ますらをぶり」……………四三

能の花と連歌の花……………六三

「まこと」について……………六六

「もののあはれ」について……………七〇

「ものはづくし」……………七六

「をかし」と枕草子……………八四

「古事記」と「日本書紀」の比較……………二五

「万葉集」の時代区分とその特色……………七三

「万葉集」「古今集」「新古今集」の

歌風の比較……………四〇〇

「古今集」の時代区分とその特色……………二五

清少納言と紫式部……………四四

「枕草子」「方丈記」「徒然草」の

比較……………六六

「平家物語」と「平曲」……………六三

貞門・談林・蕉風・天明調の比較……………五八

芭蕉・蕪村・一茶の俳風……………六三

史書—編年体・紀伝体……………六七

歴史物語・戦記（軍記）物語……………八五

◎その他

あめつちの詞……………四

「いろは歌」について……………五

忌み詞・武士詞・女房詞・隠語……………九

「おくのほそ道」の旅……………六

芭蕉紀行文地図……………三

「襲の色目」……………一八

「きぬぎぬ」の歌……………二九

「源氏物語」主要人物系図……………六〇

「つれづれ」の意味……………五四

「反歌」について……………四四

▼古典の常識一覽

平安貴族の一生……………二六

年中行事……………五

官職・位階……………四六

后妃・女官……………五三

紫宸殿・清凉殿……………五四

寝殿造り……………四二

調度……………三

楽器……………六〇

乗り物……………六

武器・馬具……………七

男子の服装Ⅰ……………四七

男子の服装Ⅱ……………五二

女子の服装Ⅰ……………二四

女子の服装Ⅱ……………五九

武士の服装Ⅰ……………三

武士の服装Ⅱ……………三三

勅撰和歌集……………四三

和歌の種類Ⅰ—部立—……………三三

和歌の種類Ⅱ—歌体—……………四九

和歌の修辞技巧……………五二

枕詞……………六四

歌枕……………一四

俳句Ⅰ……………三八

俳句Ⅱ……………二九

古典に現れる植物Ⅰ……………三七

古典に現れる植物Ⅱ……………八〇

古典に現れる動物Ⅰ……………四四

古典に現れる動物Ⅱ……………四四

特別な意味で用いられる語……………五三

名数要覧……………五三

方位・時刻・干支……………五九

曆……………七六

月齢に関する語……………七〇

旧国名対照地図……………七四

あいだ「間」↓あひだ

あいだち「し」(形)「ぶい」をた。つれない。すけない。

「夕霧が私(し)源氏の妻雲井の雁(雁)を」快にからず！
きものに思ひ給へる、わりなしや(ひひ)といことよ」(源氏
夕霧)

【参考】「愛立ちなし」(間)「立ちなし」とする説もある。

あいたん「ところ」(朝所)(名)「あしたん」の転。「あ
いたん」は太政官庁の北東にある建物。参議(大・
中納言)に次ぐ要職以上の人々が食事をしたり、政務を
つたりした所。「すなはち御神主」に「ついで太政官の」へ
わたしたてま(せ給ふ)(平家・二・鏡)

あいなし

(形) ①感心できない。気に入らない。困ったこと。あつから聞きつ
けて「人の言う悪口を自然と耳にしてゐるをみる、——し「枕・人のつへいを腹立し人
こそ」わが方(かた)にありつる事、数々に残りなく語り続くと
そー・けれ(徒然・異段)②おもしろくない。興ざめた。あじけは。『梨(もも)の花はほ
げに、葉の色よりはじめて——く見ゆるを』枕・木の花はほ
「あまに」興あつた事(事)は、必ず——きものなり」(徒
然・異段)「世に語り伝ふこと、まとは——きや」(本
当の事は平凡でつまらないのだから、多くはみなそれと
と「つくり話」ない。徒然・異段)③なんじつに「徒然・異段」。「人々おどろきて、めで
なうおほゆるに、忍ばれて、——う起き居(ゐ)つ、鼻を忍びや
かにかみたす」(源氏・須磨)④(連用形)あいなく「あいな」の形で「むやみだ」に。た
だもつ。わけも。『愛敬(あいけい)なれたる(い)ふきりような
人なほ、——くかたきにして「敵視して」枕・職の御曹
司の西面の「異人(いじん)に」通はして後も(「再婚した後も」な
ほその名(離婚前の女房名)を言はると聞きて、親の今は
——き由(よし)と言ひやむらと」(更級・三)【参考】「あやなし」(筋が通らない)「あひなし」(調和して
いない)「あへなし」(こらえられない)「愛なし」(漢
語)など「語源」諸説がある。平安中期以後多く用い
られた。あいなだのみ(あいな頼み)(名) あてにならない頼み。そら
頼み。また、法外な期待。つらき心を忍びて「思ひえほらむ
を」を見つた、と、年月をかきねむ——程度を越えた望
み)は、いと苦しくなるあるべし(源氏・帚木・三)

「き」に「方(かた)となる」(おこりた)に「更級」

【参考】「あいな」は形容詞「あいなし」の語幹

あう「合(あ)・会(あ)・逢(あ)・取(あ)・繋(あ)」↓あふ

あう「い・く」(奥行)(自方四)奥のほうへ行く。先へ先
へ行く。「こゝまでは、遅れまい(目)目も知らず走れつ
るを」(目)目もかまわず走って来られたが、——かむこと
こそ、い(い)まま(ま)ま(ま)「おもしうくもない」(枕・五月の
御精進のほ)あう「う」(奥羽)「地名」陸奥と出羽。今の東北六県
にあたる。↓古典の常識「旧国名対照地図」(六四一頁)
あう「う」(奥州)「地名」陸奥の異称。勿来(ふく
白河(しろ)の関以北の地で、今の福島・宮城・岩手・青森の
四県。↓古典の常識「旧国名対照地図」(六四一頁)あう「う」(奥州)「地名」陸奥の異称。勿来(ふく
白河(しろ)の関以北の地で、今の福島・宮城・岩手・青森の
四県。↓古典の常識「旧国名対照地図」(六四一頁)あう「う」(奥州)「地名」陸奥の異称。勿来(ふく
白河(しろ)の関以北の地で、今の福島・宮城・岩手・青森の
四県。↓古典の常識「旧国名対照地図」(六四一頁)あう「う」(奥州)「地名」陸奥の異称。勿来(ふく
白河(しろ)の関以北の地で、今の福島・宮城・岩手・青森の
四県。↓古典の常識「旧国名対照地図」(六四一頁)あう「う」(奥州)「地名」陸奥の異称。勿来(ふく
白河(しろ)の関以北の地で、今の福島・宮城・岩手・青森の
四県。↓古典の常識「旧国名対照地図」(六四一頁)あう「う」(奥州)「地名」陸奥の異称。勿来(ふく
白河(しろ)の関以北の地で、今の福島・宮城・岩手・青森の
四県。↓古典の常識「旧国名対照地図」(六四一頁)あう「う」(奥州)「地名」陸奥の異称。勿来(ふく
白河(しろ)の関以北の地で、今の福島・宮城・岩手・青森の
四県。↓古典の常識「旧国名対照地図」(六四一頁)あう「う」(奥州)「地名」陸奥の異称。勿来(ふく
白河(しろ)の関以北の地で、今の福島・宮城・岩手・青森の
四県。↓古典の常識「旧国名対照地図」(六四一頁)あう「う」(奥州)「地名」陸奥の異称。勿来(ふく
白河(しろ)の関以北の地で、今の福島・宮城・岩手・青森の
四県。↓古典の常識「旧国名対照地図」(六四一頁)あう「う」(奥州)「地名」陸奥の異称。勿来(ふく
白河(しろ)の関以北の地で、今の福島・宮城・岩手・青森の
四県。↓古典の常識「旧国名対照地図」(六四一頁)あう「う」(奥州)「地名」陸奥の異称。勿来(ふく
白河(しろ)の関以北の地で、今の福島・宮城・岩手・青森の
四県。↓古典の常識「旧国名対照地図」(六四一頁)あう「う」(奥州)「地名」陸奥の異称。勿来(ふく
白河(しろ)の関以北の地で、今の福島・宮城・岩手・青森の
四県。↓古典の常識「旧国名対照地図」(六四一頁)あう「う」(奥州)「地名」陸奥の異称。勿来(ふく
白河(しろ)の関以北の地で、今の福島・宮城・岩手・青森の
四県。↓古典の常識「旧国名対照地図」(六四一頁)あう「う」(奥州)「地名」陸奥の異称。勿来(ふく
白河(しろ)の関以北の地で、今の福島・宮城・岩手・青森の
四県。↓古典の常識「旧国名対照地図」(六四一頁)

あえか

(形動ナリ) いかにも弱々しい。繊細だ。きやし
だ。拾(ひろ)は消えなむと見ゆる玉笹(たまざさ)の上の
数(かず)の、艶(えん)に「は」で——なるすききさる風
流(ふう)のみぞ、をかくおぼさるらめ(おもしろいとお思い
でしう)「源氏・帚木・三」「紫の上は、年月を重ねれば
頼もしくなく、い(い)に「なりまの」給へる(い)いよいひ
どく御衰弱(ごじやく)なさを」(源氏・御法)【参考】「あえか」は源氏物語に多く用いられ、「源氏物
語」中の用例はすべて女性に用いられており、いかにも弱
弱(よよ)く、きやしな感じを表す。

あえし「う」↓あへなし

あえす「敢(あ)えす」↓あへず

あえなし「敢(あ)えす」↓あへなし

あお「青」↓あを

あおう「青馬・白馬」↓あをうま

あか「関(かん)・過(か)迎(よう)」(名)「仏教語」仏前に供える神聖な水
や花。また、それを入れる器。「清(きよ)げなる童(どう)子(こ)……、
たてまり、花折りなするもあらはに(は)はつきり」見ゆ
「源氏・若菜」

【参考】梵語(ばんご) ābhaya の音訳。「価値あるもの」の意。

あ「が」「吾(われ)が」(二りた)あ(代名詞十が)格助
詞 ①「主格」私が。たちちの母が見てすお
ほしく(「気持ちも晴れす」つち向きてか」別るらむ」
「万葉・五八六」②「連体格」私の。「天地(あまの)は広しむ
「どー」たは狭(せま)くやのめる」(万葉・五八六)あか「あか」(俳句)「あかあか」は。はつたなくも秋
の風(かぜ)「おくのほろ道・金沢・芭蕉」秋になくも秋
もどけに日はほくす、なほあかあかと照らしている。しか
し、さすがに吹き渡る風には秋のさわやかさ、きびさを感じ
られる(秋の風秋)あか「あか」(俳句)「あかあか」は。はつたなくも秋
の風(かぜ)「おくのほろ道・金沢・芭蕉」秋になくも秋
もどけに日はほくす、なほあかあかと照らしている。しか
し、さすがに吹き渡る風には秋のさわやかさ、きびさを感じ
られる(秋の風秋)あか「あか」(俳句)「あかあか」は。はつたなくも秋
の風(かぜ)「おくのほろ道・金沢・芭蕉」秋になくも秋
もどけに日はほくす、なほあかあかと照らしている。しか
し、さすがに吹き渡る風には秋のさわやかさ、きびさを感じ
られる(秋の風秋)あか「あか」(俳句)「あかあか」は。はつたなくも秋
の風(かぜ)「おくのほろ道・金沢・芭蕉」秋になくも秋
もどけに日はほくす、なほあかあかと照らしている。しか
し、さすがに吹き渡る風には秋のさわやかさ、きびさを感じ
られる(秋の風秋)あか「あか」(俳句)「あかあか」は。はつたなくも秋
の風(かぜ)「おくのほろ道・金沢・芭蕉」秋になくも秋
もどけに日はほくす、なほあかあかと照らしている。しか
し、さすがに吹き渡る風には秋のさわやかさ、きびさを感じ
られる(秋の風秋)あか「あか」(俳句)「あかあか」は。はつたなくも秋
の風(かぜ)「おくのほろ道・金沢・芭蕉」秋になくも秋
もどけに日はほくす、なほあかあかと照らしている。しか
し、さすがに吹き渡る風には秋のさわやかさ、きびさを感じ
られる(秋の風秋)あか「あか」(俳句)「あかあか」は。はつたなくも秋
の風(かぜ)「おくのほろ道・金沢・芭蕉」秋になくも秋
もどけに日はほくす、なほあかあかと照らしている。しか
し、さすがに吹き渡る風には秋のさわやかさ、きびさを感じ
られる(秋の風秋)あか「あか」(俳句)「あかあか」は。はつたなくも秋
の風(かぜ)「おくのほろ道・金沢・芭蕉」秋になくも秋
もどけに日はほくす、なほあかあかと照らしている。しか
し、さすがに吹き渡る風には秋のさわやかさ、きびさを感じ
られる(秋の風秋)

略。赤色に染めた袍^{ほろ}で、上皇のふだん着。時には天皇や摂政・関白も着た。「召しありて、太政大臣参り給ふ。同あか—かがねば」(源氏・少女^{おとめ})

あか—その目は—のごとくして、身一つに八頭^{やちう}の八尾^{やび}もあり(「古事記・上」)

あか—き(赤木)(名) ①皮を削った木。「よしある黒木—のませ(目)のあらひ低い垣根^{かき}」を結びませつ(「源氏・野分」) ②赤い色の木材。梅・蘇芳^{そうほう}・かりん・紫檀^{しん}などの類。

あ—がき(足掻き)(二名) ①牛馬などが足で地面をかきこむ。転じて、馬の歩み。「赤駒^{あかこま}の—速^{はや}ければ雲居^{くもい}にも隠りぬかむ袖^{そで}枕^{まくら}け吾妹^{われいもうと}」(万葉・二五〇) ②生活が苦しくて、もがくこと。あせすこと。「催促^{そそ}を受ける百両の金の—も歌舞伎^{うまき}・色読販^{いろよみ}」(源氏・五) ③子どもなどがいたずらをする。④「昼の—にくたびれて、たれない性根も長欠^{ながけ}伸^{のび}」(浄・抱狩^{だかり}など) (近松)

あか—きぬ(赤衣)(名) ①赤い色の衣。下衆^{げしやう}や召使^{めしや}など身分の低い男が用いる。「御社^{みよと}の方^{かた}より—つち着なる者どもをの連れだちて来るを」枕^{まくら}祭^{まつり}のかき(源氏・五位の人の朝服)

あか—きみ(吾が君)(名) 相手友人や恋人などを親しみて敬って呼ぶかける語。あなた。「—、生き出^でて給へ」息を吹きかえしてください。「わたしに」みじき目な見せ給ひそ(源氏・夕顔)

あ—が(わが君)より親しみ深い言い方。

あ—がく(足掻く)(自力四) ①牛馬などが足で地面をかき。また、そのまゝにして歩む。「五、六町こそ—かせたれ」(平家・小猫) ②手足を動かしてもがく。「虎さかさまに伏して、倒れて—くを」(浄・拾遺・三) ③氣をこみ働く。あせす。④蔵^{くら}のの一軒も建ててゐる。⑤—して(浄・油地獄・近松) ⑥子どもがいたずらしてあはれまわつて。⑦早く寝て疾^{はや}く起して。⑧星^{ほし}—かせが万病^{ばんびやう}に健康^{けんかう}によい薬^{くすり}。(浄・鐘梅^{かねうめ}三・近松)

あかし(明かし・灯)(名) ともしび。灯火^{てんか}。多く「御^ご」をつけて、神や仏に供える灯明の意に使つ。「み—の火けさるか

にかけさせ」(源氏・総角^{そうかく})

あかし(明石)(地名) 兵庫県明石市。神戸市の西。風景のすぐれたところとして須磨^{すま}と並^{なら}ぶ有名。源氏物語^{げんじものがたり}十三帖の巻名でも知られる。

あかし(形ク) ①(明かし)の明る。明らかである。「月^{つき}—ければ、いとふありさま見ゆ」(土佐) ②暗し。「—き浄^{きじやう}き直^{きちやう}き誠^{まこと}の心もあて」(宣命)

あかし(赤) 赤みを帯びている。「白^{しろ}い鶏^{けい}七^{しち}—き鶏^{けい}七^{しち}」(平家・二鶏合戦^{にけいがくせん}・壇浦合戦^{だんぷがくせん})

あかし(明る) ①「赤い」とは本来同じ語源であったといわれる。

あかし(くらす) (明かし暮らす) (自サ四) 夜を明かし日を暮らす。生活する。日々をすごす。「開基^{かいき}・双六^{ふろく}好みで—す人は、四重^{しやう}・五逆^{ごぎやく}にもまされる悲事^{ひじ}と思ふ」(徒然・二段)

あかし(のうら) (明石の浦)(地名) 歌枕。兵庫県明石市の海岸。明石大門^{あかしだいもん}・明石海峡^{あかしかいかい}をへたてて淡路島^{たんろじま}に對している。古来、白砂青松^{はくさしょうせい}の美景で名高く、多くの和歌に詠まれ、源氏物語の舞台ともなった。和歌「ほのぼのあかのうらの」に参照。↓歌枕

あかし(明かす) (他サ四) ①明くる。②海原^{うみはら}の沖辺^{おきべ}に—ともし漁^りする火は—してともし大和島^{たいわじま}を見む(「万葉・五・三六〇」)

あかし(疑) だしてあきらかにする。物事をはっきりさせる。②疑^{うたが}ひ藤原^{ふじわら}・嗣子^{しし}次^{つぎ} (子孫のことは、さきさま—) ③たれば(説明した)から、こまかに申さじ(「大鏡・道長・上」)

あかし(秘密) 秘密を打ちあける。白状する。「さむあしなど—して給は」事はは口重^{くちしやう}くちして、(源氏・手習) ④朝まで眠らずにいる。夜通しする。徹夜する。「志賀^{しが}の浦^{うら}に漁^りする海人^{うみづな}、家人^{かじん}の待ち恋^{こひ}あむに—し釣^つる魚^{うし}」(「万葉・五・三六〇」) ⑤御車^{ごくるま}ながら(御車に乗ったままで—させ給ふ)きたり(「落窪^{らくくわ}」)

あかし(夜が明けるのを待つ)。「蠧^{かみ}の足踏^{あしふみ}ますな—して通れ」(古事記・下) ⑥「今宵^{こんしやう}はばかりは都^{みやこ}のちて—きばや」(平家・阿古屋^{あぐら}松^{まつ})

あかし(飽かす) ①満足しない。ものたりない。「鈴虫^{すずむし}の声^{こゑ}のかきのを尽^{つく}くても長き夜^{ながよ}—ある涙^{なみだ}かな」(源氏・桐壺^{きりう}) ②「桐壺^{きりう}の更衣^{こうい}がもの心細^{こころこま}に里^{さと}がちなるを」(実家にさがって静養^{じやうや}してちであるのを) (帝は)いよいよ—あはれるものに思^{おも}はして」(源氏・桐壺^{きりう})

あかし(飽かす) ①飽きない。いやになること。いっまでも。愛敬^{あいけい}ありて言葉^{ことば}多^{おほ}かぬ。②一向^{いっかう}かはまほしけれ(いっまでも対座^{たいざ}していた)ものだ(「徒然・段」)

あかし(なごり) ①さばかり恐^{おそ}ろしくなる山中^{やまなか}に立ちて行くを人々^{ひと}々々^{々々}思^{おも}ひて皆泣^{みな}くを(「更級^{よりしろ}」)

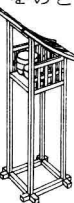
あかし(助動詞) ①(人動ク) (人動ク) (生没年未詳) 平安中期、一条天皇時代の女流歌人。大江匡衡^{きやうかう}の妻。藤原道長の妻倫子^{りんし}に仕え、上東門院^{かみとうもんいん}藤原彰子^{てんげんあきこ}の女房となった。歌才では和泉式部^{わいせんしきぶ}と並び称せられた。歌風は穩健^{うんけん}で、屏風歌^{びやうぶた}・歌合歌^{かあが}にすぐれたものが多い。家集「赤染衛門集」。和歌は五六六首参照。

あかし(東) (名) ①上代、地方豪族の所有地。大化の改新^{たいかのかいしん}以前に開墾^{かいこん}によって所有地となったもの。「東^{あづま}の諸^{しよ}の—は、すべてあづまの国^{くに}と稱^{なづ}ひき」(常陸^{ひろは}・風土記)

あかし(上代諸国) ①朝廷が直接治めた土地(御料田) ②平安時代、国司などの地方官が任国をさしてよんだ語。—へ行く人に、むまのはなむけせむとて(伊勢・四)

あかし(地方官) ①の任期が果てて(土佐) ②地方。いなが、田面^{でんめん}なるわら屋^{わらや}の軒^{のき}の薦簾^{せん}これや—のしるしなるらむ(「夫木^{ふき}・雜三」)

あかし(ありき) 累歩^{るいふ}き(名) 律令制度のもとで、地方官勤務のこと。また、その人「たのし人^{たのしひと}」頼りにする人。この場合は作者の父倫寧^{りんねい}をさすは、この十余年のほ、—にのみあり(「蜻蛉^{せいてい}」)

あかたな（閨加棚）（名）

【あかたな】

仏前に供える水や花などを置くたな。南に竹のすゝを敷き、その西に—を「作り」方丈。↓閨加

あかたぬし（果主）（名）上代、大化の改新以前の、果を治める長官。「大果小果の—を定め給ひき」（古事記・中）

【参考】あかたぬしは、飛鳥時代、孝徳天皇の時に廃止された。

あがためし（果召）（名）「果召しの除目（り）」の略。諸国の国司を新たに任命する行事。毎年陰暦正月十一日から三日間行われる。春の除目。翌「新玉（あ）」の年立ち返る春の—にかすまへとめ、数に入れていたきたいと申す（栄花・とまへへの行幸）→司召（り）。↓古典の常識「年中行事」五卷、一七

あかち（赤地）（名）赤色の織り地。

あかづ（頌つ）（他々四）分ける。割り当てる。「女房・侍・家司（り）」下人まで別々—「ちあてさ給ひて」へ大鏡・道長・上々

あか—つき

【曉】（名）「あかとき」の転。上代は「あかとき」、中古以後は「あかつき」。夜明け前。未明。「あけぼの」より早い時刻をいう。「—をなに待たけむ」なんだって待ったのだろ」思ふとどなたかぬ鐘の音ぬ。鐘の音の—に「更級（り）」。「わが食ひたき時、夜中にも—にも食ひて」徒然（六）段

【字引】

「あかつき」と「しのめ」と「あけぼの」の関係上代には、「アサ（朝）—ヒル（昼）—ユフ（夕）」という昼を中心とする時間とよび方と、「ユフベタベ—ヨヒ（晝）—ヨナカ（夜中）—アツキ（曉）—アツタ朝」という夜を中心とする時間とよび方とがあつたといふ。

昼の時間が、公的な時間であり、勤労の時間であつたすれば、夜の時間は、私的な時間であり、恋の時間

であつた。この夜の時間の区分は、当時の、男性が女性の住んでゐるところを訪ねて行くという求婚や結婚の形態とでも深いかわりをもっているといわれる。（→きめきめのつた）

「アカキ（明時）」から転じたといふ「アカツキ」は、その区分によれば、夜を共にした男女が別れ別れになる時間の意味しているといふ。人と人との別れは、何事であれ、辛く苦しいものであるが、それが恋する男女であれば、その思ひは、いさゝか切実なものであつた。

古来、人の関心の集中するところの語は、分化を起しやすといふのは、言語の基本原理の一つであるが、人々が、切ない別れの時間である「あかつき」という時間帯に着目し、これに「しのめ」と「あけぼの」を加えようとしたのは（時代的には、中古といわれている）一つの必然であつたと思ふべきであらう。

「しのめ」は、夜が明ける一歩手前であることをいい、「あけぼの」は、空がうす明るくなることをいう。従つて、一応は、「あかつき」の終わりが「しのめ」、「あかつき」の次が「あけぼの」とあるといえる。しかしこの時間区分は、その重点をそこにおいたかたがたこの相連であると考えたほうが事実的に近く、厳密な区分は、当時の人々にとつても必ずしも明確ではなかつた。

時代が下がつても、この区分をもつと明確にしやうという方向には進まずに、その境界線はますます不分明になり、しだいにこれらは混同されるようになった。

あかつき（おき）（名）①夜明け前に起きること。

「山路の—をほちけりなりくつしよりぬれて」②夜明け前に起きて動行（り）すること。「—の袖（り）の上、山路の露もけくして」へ平家・灌頂（り）・大原御幸

あかつき（かた）（名）夜明け前のまど暗いところ。未明。「物語などし給ひて、—になつてぞ寝給ふ」源氏・東屋

あかつき（つくく）（名）①「あかつき」上代は「あかつきく」とも②月の残っている夜明け方。また、その月。夜深き—

の、えもいはず霧り渡れるに」源氏・賢木（り）「あかて」飽かに」もの足りなく。満足しない。不満で。「むさぶ手の掌に」もの山の井の—も人に別れぬるかな（歌意は五五・リジ参照）へ古今・離別

【なりた】あか（四段動詞）飽く（る）の未然形十で「打消の接続助詞」

あか—とき

【曉】（名）「明がとき」の意。中古以後は「あかつき」（上代語）夜明け前のまだ暗いところ。「—の夢に見えつつ梶島（り）の磯」越す波のしきと思はゆへ万葉・三三。↓あかつき

あかとき（つくく）（名）「あかつきく」とも①月の残っている夜明け方。また、その月。「時雨（り）降る—紐。解かす恋さむ君居（り）まじしものを」へ万葉・三三。↓

あかなく（に）（名）①「—」が詠嘆・感動の意を表してあき足らないのになあ。「春雨（り）に句へる色も—香さへなかし山吹（り）の花へ古今・春下」②「—」が逆接の意を表してなかりが惜しいのに。「—まきも月のかるるか山の端（り）にけて入れずもあらむ（歌意は次項参照）へ古今・雑上」

【なりた】あか（四段動詞）飽く（る）の未然形十で「打消の助動詞」の未然形の古い形十で「接尾語」十に間投助詞。↓なりた

あかなく（に）（名）あかなくに。まだきも月。のかかるか。山の端（り）にけて。入れずもあらむ」へ伊勢・八三へ古今・七雑上・八四。在原業平（り）「まだ眺めあきないのに、早くも月は隠れるのかあ。月のはいる山の端が逃げて、月を入れないでほしいのだ。」

【参考】酒宴を退席する性喬（り）が親王を月にみた。あがな（ふ）（他ハ四）「あがなふ」①贖（り）金品を出して罪をつぐなふ。「—宿を供養して罪を—ひたてまらむ」へ雨月・青頭（り）中。↓あがな

②購（り）買い求める。「妓女（り）（遊女）にかくなじみてつひに—ひ出だし（身うけし）て」雨月・吉備津（り）の釜。↓

【参考】室町時代末に「あがな」から派生したといわれる。